

高齢者ケアセンター Bernadottegaaden

(ベアナドッテゴードン)

お話：P.I.C.部長：Ms. Lone Krag Nielsen

(ロナ・クラク・ニエルセン)

報告：松本泰夫

★はじめに

ロスキレよりバス移動で到着したところは、緑が広がる牧草地の静かな環境に恵まれ、高齢者には大変生活しやすいところにこの建物はありました。

手厚い歓迎に私たちが緊張していましたが、研修モードに全員が切りかえて学ぶ姿勢を作りペンをとることが出来ました。

そこで登場していただいた施設長のローナさんからの説明に皆が聞き入っておりました。一番最初に話していただいた言葉がレジスタンスという暗黒時代を生活した、いわゆる捕虜の会のことでした。

既に40年を経過しており当時は自立していましたが、今の時代にはつかっていないため今後は認知症の高齢者が生活しやすくをモットーに、建て直していく予定と説明がありました。

特に認知の人に優しい居場所の提供をされようとしている一つ一つの言葉に印象付けられました。

★生活しやすい施設をめざして

現在の施設は60室60名のかたが判定されてお住まいですが、ここに到達するまでの大変な苦労話などを交えて、いかに高齢者が住み慣れた場所を家族と離れて生活していただけるか、どのようにして生活しやすくしていただくかが未だ課題のように説明していただきました。そして、一番の懸念は移り変わってきた最初のその日に、落ち着いて安心感が得られるようにとコンタクトパースが看護師とともに行うという配慮が一番の



<ベアナドッテゴードンにて>

作業であるとのお話に、いかに住み慣れた場所と慣れ親しんだ家族との別れが高齢者にとって寂しいものかを知ることが出来ました。

★今日を有意義に

それにすべての社会資源を利用すべく、関係機関やOT・PTなどの協力のもとで、その人の歴史(フェイスシート)を作ると同時に生活リズムの情報を集積する大変な作業にもなっているとのことでした。

施設においてはその人がどのように生活したいか、リハビリによりどれだけの既存運動能力が残されているか、楽しく今後の人生を全うするには何が必要であるか、いわゆるロスキレ全体の課題でも取り上げられているようですが、特に今日を有意義に生活してもらうという本人のニーズを大切にされていました。

特に仲間が作れない人が多くて自閉的になることがあるので、なるべくリビングに引き出したり、夜間徘徊を防ぐため自助具を使って楽しく運動したりする機械がいたるところに設置されていました。



心して預けることが出来るシステムです。

そのためには当然スタッフが 80 名登録されており職種はさまざまヘルパー・介護士・用務員・キッチンスタッフ・実習に参加される生徒も一員として参加しています。それと看護師を 11 名も交代で雇用していると話しておられました。

とにかく、手厚い看護能力をもった施設であることには間違いがないことを確認させていただきました。

★ここに移住してよかった

ローナさんが言いたいのは、この施設をアットホーム的に生活して本当にここに移住してよかったとさせていただく事が一番の楽しみであり、これからも環境を整えて行きたいとの会話の中、着々と進められていることに感動いたしました。

★手厚い看護能力をもった施設

この施設にはショートステイも 3 室確保されており、配偶者が旅行や病気で面倒見られないときなどに、期間に限度なく利用することができるようになっており心配なく安

★むすびに

出発するまではだまされた研修という観点でしか思っていられませんでした。色々な職種の皆様と出会い楽しく研修に参加できましたことは、夏代さん、中能さんの多大なるご尽力のたまものであり名残惜しくも挨拶していると、何か心の中に穴があくほどの寂しさが湧き上がり、仲間意識の強さをつくづくと感じた次第です。

本当にありがとうございました。

